2005 年度　甲子園研修報告

中野高等学校　関島資浩

1，はじめに

今回甲子園への視察研修に参加できたことに大変感激しています。今まで参加しなかったことが惜しく思えるほど、実際にいろいろなところを見学できたことが自分の糧になったと感じています。よく言われることでありますが、「百聞は一見にしかず」という言葉がピタリとくる視察研修であったと感じています。

甲子園での試合内容を考察して・・・ということは苦手でもあるし、他の方が行ってくれるのではないかという他力本願的な考えで私のレポートを作成したいと考えています。

2，研修での収穫

まず私にとって一番の収穫となったのが、このような研修会ではないと入れない甲子園の諸施設にはいることができたことです。なぜなら甲子園の観戦自体ならば暇さえ作れば可能なことに対して、前述したことについては簡単にできないことだからです。

このことが何に生かされてくるのか？　　それは幼稚な考え方ではありますが、実際に甲子園球場に県の代表として入場、そして試合を行う、というイメージをつくることができたことです。

「何を子供みたいなことを・・・」とお思いになる方もいらっしゃるとは思います。確かに一般の方でも甲子園の外観（外回り、観客席、グラウンド）だけで甲子園という物をイメージすることは可能です。

しかし、それをもって「甲子園のイメージ」とは言えないと、実際に施設を歩かせて頂く中で気づくことができました。

それは大会運営に関わっていらっしゃる役員の方が忙しい中で時間を割いてつくって頂いた短い時間での説明ではありましたが、私にとっての一番の収穫になりました。順を追って書き出してみます。

バスから降りた選手が通る通路、練習を行う場所（雨天練習場）、試合の時使用するダッグアウト、試合が終わってからの通路、インタビュー会場（通路利用）、その後の理学療法士による両チームのストレッチ指導、投手の肩肘チェック・ストレッチ、帰りの移動通路（バス駐車場まで一般客と遭遇せずに）等々。

ただ、そうは言っても県で勝ち進む力をつけなくては話にはなりませんが、いろいろなイメージトレーニングがある中で、監督として甲子園出場を夢見るのに一番イメージしやすい物を見せて頂いた気がします。

その他参考になったことについてですが、プレー自体各都道府県の代表になっている学校ばかりなのでレベルが高いのは当然だと思います。

その中でも各学校そうではありましたが、基本がしっかりしていることに加え、守備での「シングルハンドキャッチ」が非常に上手であるという点が挙げられます。守備範囲をできるだけ広くしつつも、前方の打球に対しての反応とその後の捕球、そして送球と、速い動きの中での身体バランスが非常に優れていることに感心しました。確かに、基本は大

事ではありますが、いろいろな動きを取り入れた守備練習をやっていくべきだと強く感じました。
　とかく、「こんなプレーはうちの選手では不可能だ」と私は思ってしましますが、挑戦することは誰にでもできることなので、目標を高く持つ意味でも自分のチームの選手に夢を持たせる意味でも挑戦させたいと感じました。

　その他にもプレーではありませんが、細かいことで参考になったことを１つ。
　宮崎県ウルスラ高校のコーチャーは攻撃から守備に移るとき、ダッグアウトに向かう途中、毎回ホームベースの周囲をきれいに足でならして凹凸ができるだけない状態にしてダッグアウトに戻っていました。これは守備についた自分のチームのキャッチャーが余計なイレギュラーをしなくてもいいようにという気遣いだと感心し見ていました。実行されている学校もあるかもしれませんが、参考になりました。
　このような行為は一流選手だからできることではなく、気配り・心遣いはどんなチームの選手でも取り組める最も重要なことであると、その行為を見ていて改めて自分の指導の根幹を意識させられた思いでした。
　プレーを鍛えることはもちろん、人間としての心を鍛え育てることも重要であると、その行為を見ていて感じました。

　その結果、いつの日か甲子園の土を踏めるようにこれからも野球の指導に当たっていきたいと思います。

３，あとがき

　本年度北信地区代表ということで甲子園研修会に参加させて頂いたことを心より感謝致します。そしてこの企画をして下さった高野連事務局のみなさま、そして同行して頂いた寺沢先生、西條先生には大変お世話になり感謝の気持ちでいっぱいです。この場を借りてお礼を申し上げたいと思います。
　報告する内容としてはとても幼稚で、しかも字ばかりで読みにくく、しかも参考にもならないようなもので申し訳ありませんが、これで甲子園視察研修のレポートとさせて頂きたいと思います。
　大変いい経験をさせて頂き本当にありがとうございました。

『 甲子園研修 』を終えて

長野県小海高等学校
監督　赤須　健士

８月１０日～１２日（３日間)、甲子園研修に行かせていただき、大変貴重な体験をさせてもらいました。(夏期休暇の中、そして、蒸し暑い兵庫県に、少々抵抗がありましたが。)日程は３日間、甲子園漬けでした。しかし、いつもはブラウン管を通して見ていたものが目の前にあり、直にその熱気を感じることができました。

目指すは、観客席でなくグラウンドで ――― 。

レポートということで、何を書こうか悩みました。試合について多く書いても、放送もされていますので、実際に甲子園に行くまでは感じることが出来なかった事について書きたいと思います。私が無知なもので、皆様がすでにご存じの事でしたら、つまらない文だと思いますので飛ばしてください。

改めまして、『 日程について 』

甲子園の日程は、ほぼ１日４試合あります。最近は、照明をつけなければいけない試合が多くなった気がします。それを効率よく運営するために、どうしているのか。聞いてみました。

○ 試合までの日程（ １試合目よりも、２・３・４試合目に注目した。
しかし、３・４試合の流れは同じなので省略します。 ）

試　合 時　間	第１試合	時　間	第２試合
試合開始 １時間３０分前	インタビュー１０分程度 １塁側室内練習にて。 その後、３塁側室内 練習場に移動（記者)。 シートノック ↓ 試合　　（簡略）	試合開始予定 ２時間１０分前	球場入り 正面通路から１塁側、３塁側室内練習場へ。(因みに、３試合目以降の入りの時、試合終了と重なってしまった場合は、 １塁側：３号門より ３塁側：検品の門より 入る。)

	↓	２時間前	インタビュー１０分程度 １塁側室内練習にて。 その後、３塁側室内 練習場に移動（記者）。 その後、練習。 ピッチング、キャッチボール、バッティング等、自由。
		試合終了寸前	とりあい通路で待機。
	第１試合終了 勝チームからバックネット入口から退場。 （負チームは土をとっているため。などなど）	試合終了 試合終了後 １分後	終了と同時にグラウンドへ入場。（＊１） キャッチボール開始。
		２分３０秒後	放送：ノックの準備。
	インタビュー その後、 理学療法士による、ストレッチ指導。（＊２）	３分後	ノック開始。 両校終了。
ストレッチ終了後、バスへ。 移動時間は 約３分	帰りルートは人目に触れない裏ルートあり。 阪神監督室前などを通り、バスまで移動。	ノック終了、 １０分後	グラウンド整備 試合開始。

色々と略させて頂きましたが、流れです。

そこで、私なりに感じたことをあげてみました。それが（＊１，２）です。

＊　１：わずか３分後にはシートノックが始まる。特に負けたチームのベンチ前は両チームの選手がいるためになかなか道具をベンチに置くことができない状態に。

　見ていた試合で、なかなかベンチに入れず、キャッチボールができずいたところにシートノックの放送が入り、それでもすこしキャッチボールをしていたら、次の放送で「ノックあと何分です。」という形で始められてしまった。慌てて始めたが、時間はそのまま流れていました。　　時間がないのはわかるのですが・・・。

＊　２；選手の前で３人が見本を見せ、選手に数を数えさせるという方法をとっていました。クールダウンで、体の管理・安全ということでした。投手は、別にその場でベットが用意されマッサージをしていました。しかしながら、泣きながら肩を震わせている選手も強引に。そうでもしないと、ダウンをやらないのはわかるのですが・・・。

安全という面で、以前からの投手全員のレントゲン撮影、理学療法士の起用、さらにはＡＥＤの設置と、選手の体の管理に大変気を配っていることはわかるのですが、試合時間短縮のためのグラウンド内の様々な行動の時間短縮（もちろん移動はダッシュなど良い面もあります。）は、少し疑問が残りました。

しかし、甲子園の運営上、そこの変更はないと思いますので、甲子園に出場した時に、困惑しないよう県大会でもそういう行動を心掛けなければいけないなと、感じました。特に私のところはそういう行動が遅いので、普段の練習から、さらに私生活から指導していこうと思っています。

今回の研修では、ただ観戦であるというような普通で行ったでは絶対に見ることができない場所、選手達の行動、そしてなにより、絶対に感じることのできない雰囲気を肌で感じることができ、収穫の多いものでした。

このような研修を計画して頂き、まことにありがとうございました。

末筆ではありますが、研修レポートとさせて頂きます。

甲子園研修報告書

諏訪二葉高等学校野球部監督
櫻井　浩二

１．期間　平成１７年８月１０日（水）～１２日（金）　３日間
２．観戦試合

大会第５日目	第２試合	沖縄尚学（沖縄）	４―１	松商学園（長野）
	第３試合	日大三（西東京）	６―２	高知（高知）
大会第６日目	第１試合	前橋商（群馬）	５―３	熊本工（熊本）
	第２試合	駒大苫小牧（南北海道）	５―０	聖心ウルスラ学園（宮崎）
	第３試合	日本航空（山梨）	８―７	福井商（福井）
	第４試合	銚子商（千葉）	７―１	鳥取西（鳥取）
大会第７日目	第１試合	樟南（鹿児島）	１３―４	花巻東（秋田）
	第２試合	高陽東（広島）	４―２	土岐商（岐阜）

３．研修感想

①高知高校について

開幕２日前に不祥事で出場辞退した明徳義塾に代わり、急遽高知県代表になった高知高校の試合を見ることができました。地区大会が終わり、引退した３年生は満足な練習などできずに乗り込んできたと思います。その中で周りの観衆なども頑張れという応援のなか、可哀想だなという思いで見ていたのではないでしょうか？しかし試合が始まり、２回に日大三が４点を奪い、このまま日大三の一方的なペースかと思いきや、高知高校が踏ん張り、強打を誇る日大三を相手に投手はじめ、バックの守備も無失策で守り切ります。結局２－６で敗れてしまいましたが、選手たちに悲壮感はなく、さばしばした様子で甲子園を後にしていました。

まずはこの試合から、このような非常に珍しい事態から地区準優勝チームが甲子園に乗り込んできて、優勝候補の一角とされたチームに接戦を演じた高知高校のレベルに驚かされました。そして各地区予選において準決勝、決勝まで勝ち抜いてくるチームにはそこまで実力差がないのではないか、またその接戦をものにして甲子園まで勝ち上がってこれるチームの要因は技術・体力以外のものも大きく関係していることを考えさせられる試合でした。

また今大会ではこの件だけでなく、大会終了後に発覚した駒大苫小牧の暴力事件もありました。今後このような悲劇を起こさないためにも、単なる部活動ということだけでなく、高校野球という特別な活動ということを自覚し、クラブ運営をしていかなければならないと再認識させられました。

②シートノックについて

７分間という時間を使っての、各チームの工夫されたシートノックが勉強になりました。特にシートノック最初に行われる、まとまってのボール回しだけでなく、ノックを受けた後の送球から多くのポジションを介してボールを回しているなど、送球に気を使っていたチームが多かったです。また甲子園特有の風対策か、内外野含めたフライ捕球を時間いっぱいまで行っていました。

③試合全般について

とにかく、全体にスピードに目を奪われました。ピッチャーの投げるボール、バッターのスイング、守備のステップワーク、ランナーの走塁など、どれも力強く、あまりのレベルの高さにただただ感激しました。また試合自体のテンポのスピードもとても速いものでした。ピッチャーの投球フォームから投球間隔、サインの確認、攻守交替など、ベンチの控え選手の動きを含めてすべての選手が関わって試合をつくっているという印象がありました。

④舞台の裏側について

様々な点に配慮をされて大会が運営されていることがわかりました。試合前の球場入り、試合後の制限時間を設けてのインタビュー、各チームに行われるクーリングダウン、記者・観衆などから遮断しての室内練習場でのアップ、ブラスバンド保護のためのネット増設、応援団の入退場など、普段テレビからでは垣間見ることのできない現場を、大会役員の方に説明・案内していただけました。特に試合が終わってチームが球場を後にする時には、役員先導による裏通路（？）を通り、バス停留所まで案内するのを、選手に続いてついていかせていただき、ここまでガードされながら試合をするのが、多くの人から注目される甲子園という舞台なんだなと実感しました。

４．最後に

今回の甲子園研修に参加させていただいて、大変貴重な経験をさせていただきました。素晴らしいグラウンド、大勢の観客、両校のアルプス席からの応援、周りでサポートする大会関係者の活動などとこれらを含めて甲子園独特の雰囲気にただ感激するあまりでした。そしてここに是非選手たちを連れてきたい、ここで戦ってみたいという気持ちになりました。また、今回同行された先生方と意見交換をするなど交流させていただいたことも大きな勉強になりました。この度の研修で経験したこと・勉強したことを生かして、よい指導、よいチーム作りをしていきたいと思います。

最後にこのような研修の機会を与えてくださった長野県高野連の役員の皆様、現地でお世話になった甲子園大会役員の皆様、そして今回の研修に一緒に同行、案内していただいた西條先生、寺澤先生に厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。

平成１７年　　甲子園研修レポート

松本筑摩高等学校　丸山　淳一

日程　８月１０日（水）～８月１２日（金）

西條先生・寺澤先生に引率していただき、関島先生（中野）・赤須先生（小海）・桜井先生（諏訪二葉）の合計６人のメンバーで３日間の研修を行ってきた。私は甲子園に行くのが初めてであり、とてもワクワクした気持ちで研修初日を迎えた。特急しなの、新幹線、阪神電車を乗り継ぎ甲子園球場にたどり着いた。幼い頃からの憧れであり、今まで映像や写真でしか見たことがない蔦に覆われた甲子園球場が目に飛び込んできた。球場周辺には都道府県代表校全チームのプラカードが置いてあり、希望者にはプラカードを持って無料で写真を撮ることができるサービスが行われていた。球場の中に入ると平日にもかかわらず、多くの観客や応援団でスタンドがにぎわっていた。途中からではあるが我が県代表の松商学園の応援にも間に合うことができた。ノーシードからたどり着いた甲子園。強豪沖縄尚学を相手に、初戦突破はかなわなかったが、清野君のホームランは気持ちがよかった。また、２年生宮島君の力投など来年への明るい材料も残ったのではないか。次の試合は高知　対　日大三。高知代表に決まっていた明徳義塾が不祥事で出場を辞退し、開幕２日前に代表校が入れ替わるという異例の事態になった。代わって代表となった高知は全国から注目される中で緊張に押しつぶされることなく、逆に舞い上がることもなく、はつらつとしたプレーで高知代表として立派な姿を見せてくれた。また、監督がベンチの端から端まで動き回り、声を枯らしながら大きな声で選手に指示を出していたのが印象的だった。研修２日目の第１試合は熊本工　対　前橋商。前橋商が勝利した。併殺、重盗を読み切っての本塁タッチアウト。外野手の好返球、難しい当たりに跳びつく好捕。 など、前橋商の堅守と上位打線が徹底的に警戒されて打ちあぐねた分、下位打線が奮起したことが接戦をものにした要因であったように思う。第２試合は駒大苫小牧　対　聖心ウルスラ。駒大苫小牧が勝利し、昨年の覇者の貫禄を見せた。しかし、聖心ウルスラは初出場ながら健闘した。投手の直球は１３０キロ前後と決して速くないが、制球がさえ、変化球がコーナーに決まった。強力打線を相手によく５点に抑えたと思う。打線は高めに浮く直球に手を出し、ボール球を見極められず、凡打に打ち取られるケースが目立った。第３試合は福井商　対　日本航空。日本航空は逆転の末、接戦をものにし、８－７で勝利した。福井商は失策や四死球の走者で相手に得点を与えた他、残塁が多く、流れが悪かった。日本航空の勢いを止められなかった。研修最終日の第２試合、土岐商　対　高陽東。土岐商の投手は速球が持ち味のいいピッチャーであった。ブルペンではいい球を投げていた。試合前は土岐商が勝つのではと予想していたが、結果は高陽東の勝利。序盤、プレッシャーを感じての動揺があったのか３回までに４失点。バッテリーや内野のミスもあった。４回以降、投手が本来の

調子を取り戻してからは失点がなかった。序盤にメンタルの弱さが出てしまったのが敗因につながったように思う。

何試合か観戦して思ったことは、選手層の厚さであった。特に投手陣である。どの投手が出てきてもエースと呼べるようなチームもあった。地方予選を勝ち抜き、甲子園にたどり着くためには連戦が続く。しかも負けられない連戦の中では投手の力量がかなり重要になってくる。一人のエースにおんぶにだっこでは連戦の疲れで本来の力を出せなかったり、たとえ甲子園に出られたとしても予選の連戦で酷使した結果、故障してしまい、本大会で力が出せないまま終わってしまう。また、エースが崩れてしまったら勝算がまったく見込めなくなってしまうケースもよくある。逆に複数の投手を擁するチームは調子が悪いと思ったら、手遅れにならないうちにすぐに選手交代できる。やはり、層の厚い複数投手が必要である。甲子園に来てあらためてその必要性を感じた。

その他、キャッチボールがしっかりできている。どんな打球を打っても最後まであきらめない、全力疾走の走塁。相手のスキにつけ込んだ積極的な走塁。甘い球は初球からでも積極的に打っていく打撃スタイル。など多くのチームに見られた。また、バッティングマシンを使って速球の打ち込みをしてきているせいか、速球に対しては多くの選手が対応できていたように思う。速球は投手の大きな魅力のひとつだが、速球だけでは甲子園で通用しないと思った。また、選手は大観衆を前にし、相当のプレッシャーがかかると思う。そのため、選手が持っている力を十分に発揮するためにはメンタル面強化の必要性を感じた。

試合観戦以外にも大会運営に関わるスタッフの仕事の様子や工夫も見せてもらった。第２試合目以降の選手は、試合２時間前に室内練習場へ入る。室内にはテレビが置かれていて前の試合の様子も確認できる。試合直前ということもあり、選手のメンタル面を考えて室内へは校長以外のものはシャットアウトしているということだった。試合前の取材は１０分間のみ設けられていた。選手たちが飲むドリンクは各ベンチに用意されていて中身は大塚製薬のエネルゲンを３倍に希釈されたものが入っているとのことであった。３塁側ベンチ裏には理学療法士が待機しており、その日に試合のない選手でもマッサージを受けることができる。３塁側の室内練習場にはレントゲン室があった。日本の球場の中でも唯一甲子園球場にしか設置されていないようである。両ベンチ裏には＊ＡＥＤ（自動体外式除細動器）が１台づつ設置されていた。試合が終わると甲子園球場を管理する阪神園芸のスタッフにより、手際よく整備される。１塁側ベンチ脇より勝者チームから先にグランド出る。その後、勝利者、敗者のチームがそれぞれ分かれてインタビューが始まる。タイムキーパーがいてインタビューの時間も決められていた。取材が終わると複数の理学療法士の指導のもと、ストレッチが行われる。選手はその後、人目に触れることなく球場内の通路を通ってカーテンが引かれたバスに乗り込む。バスも人目につかない場所に駐車されていた。ファンが殺到して混雑やトラブルが起きないよう配慮されていた。甲子園ボーイは言わばアイドル的な存在でもある。昨年の甲子園を沸かせたダルビッシュ投手の人気はものすごかったようである。応援席にも工夫がされており、ブラスバンドが陣取る席の横のネ

ットは打球が人に当たらぬように高く設置してあった。楽譜を見ての演奏になるため、大変危険なようである。また、試合後、応援団の移動で混雑を避けるために、入り口と出口が別々になっており、別の応援団同士が入り混じることを避けた工夫も見られた。
大きな大会を運営するための工夫やたくさんの配慮があちこちで見ることができた。ただ、残念に感じたことがひとつある。それは試合後のストレッチである。負けたチームの号泣している選手たちに強制的にストレッチをやらせるのはどうかと思った。この状況でストレッチをさせるのは酷である。一斉にストレッチをさせなくてもいいのではないか。宿舎に帰ってからでも個別にできるものである。もっと選手の気持ちを考えた配慮があってもいいのではないかと思った。

この研修の３日間、試合観戦や球場見学、研修者同士の野球談議などを通して多くのことを学ばせてもらった。とても有意義な３日間を過ごすことができた。これも引率していただいた西條、寺澤両先生をはじめ甲子園でお世話になった奈良井先生ほか多くの先生方、関係者の方々の協力があったからである。この場をお借りして感謝を申し上げたい。本当にありがとうございました。高校球児の聖地で、憧れの場所である甲子園、本当にすばらしい魅力的な所であった。

＊AED とは

AED（自動体外式除細動器）とは電気ショックが必要な心臓の状態を判断できる心臓電気ショックの器械です。
突然死の死因のほとんどは心臓疾患です。それを心臓突然死といい、その大部分は心室細動という病気です。
心室細動になると心臓がけいれんし、ポンプとしての役割が果たせず、助かるチャンスは１分経過するごとに約 10%づつ失われ、10 分後にはほとんどの人が死に到ります。この心室細動を正常な状態に戻す唯一の方法は除細動（心臓への電気ショック）です。そこで、早期の除細動ができる AED の使用が必要となり、素早い除細動は社会復帰の鍵にもなります。AED を自宅、学校、職場、たくさんの人が集まる公共の施設など様々な場所に置き、AED を使うことで、突然死を防ぐことができるのです。AED は除細動が必要かを判断し、救命の手順を音声にて指示します。AED は除細動を含めた救命行為が簡単に出来るように作られています。